プロローグ

　その日も、
　その日も平凡な一日で終わると思っていた。
　いつものように弟妹たちと一緒に経営する酒場で、仙女にはまっている羌族たちを相手に、酒に干し肉や果実を売って夜中まで働く。時々気晴らしに、すっかり長年の付き合いになってしまった張さんと他愛もない話なんかして、それで一日が終わる。
　そう思って止まなかった。
　つい、数分前までは。
　酒場を経営して十年。酒に酔って喧嘩するやつらの仲介に入ることも多々あったが、さすがにこんな事態に直面したのは初めてだ。人生最大のピンチに直面していると断言できる。
「崑崙一にして仙界最強のスーパーアイドル、ヒーロー 哪吒様とは俺様のことよ！　殷王『紂王』、悪逆非道の数々、天が許してもこの俺が許さねぇ。さぁ、観念しやがれ！！」
　……もうね、何ていうかさ。

「はい？」

　って感じです（笑）。

＊　　＊

　中国の四大怪奇小説という代物をご存知だろうか。
『三国志演義』
『西遊記』
『水滸伝』
　そして『封神演義』
　紀元前数十世紀の古代を時として、今でいう中国と呼ばれる国を舞台として物語は紡がれる。
　人間と同じ風貌をした超人たちが登場し、『仙人』と呼ばれる彼らは、人ならざる化物、妖怪を相手に戦い続けていく。殷という国を舞台に歴史あり、ロマンありの見事なストーリーが展開されていく傑作である。事実、現代における評価もすご〜く高い。その証拠として、１０年ぐらい前には漫画として〇年〇ンプで掲載され、少年たちの純真な心に永遠に残り続けることになったことを、まだ多くの人々が覚えていると期待する。
　この物語は、それにちょっとだけ似た、かなり可笑しな物語。
　殷が既に滅んでいたり、仙人が女の子しかいなかったり（彼女たちを仙女という）、アイドル化していたり、メガネ、猫耳、スク水やバニーなど、どこからどう見ても現代製品の、男のロマンの産物

があったり、中国なのに『ハロ～』とか『グッモ～ニ～ング』とかを家族と冗談交じりで話したり、あろう事か『ちょっ、ごめん。そこのタオル取ってくれる』『歯ブラシどこ置いたっけ？』『夕飯はハンバーグで宜しく』などなど、我々日本人が日常で使っている外来語が登場したり、PC の関係上登場人物の漢字が少し違ったりと、かなり可笑しなことが起きているが、それは妄想もとい想像の世界だからご容赦願いたい。
　かくして、乙女の花園アイドル一杯ドタバタコメディー、ちょっとしたエッチもあるよ演義。
　略して（略してないけど）『封神艶戯』。
　始まり始まり。

１　仙界からの御使い

　……何だ、この状況？
　現在の状況が飲み込めず、おれは危険も省みずに現状把握を断行した。
　吹き飛んだ店の一角を気にも留めず、腹の底から狂ったように大歓声を張り上げる男衆。
　その中心で空中に浮かんでいるのは一人の女の子だ。
　穂先から火炎を巻き上げる真紅の長槍が、こちらの眉間目掛けて真っ直ぐに突き出されている。
　その柄を握り締めるのは小柄だが、それを感じさせない威厳と自信に満ちた少女。
　春に色づく桜のように、魂を惹きつける桃色の髪が男たちの喧騒と時折流れてくる夏風に乗って半透明の羽衣と一緒にふわふわと羽のように揺れている。掌に収まりそうな小さな顔に人形のように整った顔立ち。目や鼻や口や輪郭、どれをとっても可愛いという表現から抜け出せない。真っ直ぐにおれの瞳を射抜く眼差しは強靭な意志の表れだ。
　可憐な風貌の中に強い存在感を醸し出している姿は、とある島国で縦横無尽に咲き誇り、数千年もの間人々の心を捕らえて離さない桜のようだ。
（落ち着け。こういう時は深呼吸だ。自己紹介も兼ねてまずは一日の回想から始めてみよう）
　と、いうことで回想シーンスタート。

＊　　＊

　太陽が丁度真上に差し掛かった頃だったと思う。
　いつものように店を開けていると、蒸し暑い外気と共に腰を曲げた爺さんが入ってきた。
「ああ、張さん、いらっしゃい」
「お疲れさん。旦那も毎日こんな連中相手に大変だねぇ」
　この老人は張さんと言って店の常連客だ。数ある客の中で最も親しく、弟妹たちの次に長い付き合いでもある。老人特有のしわがれた声だが、声の抑揚やはっきりしているし、今年で７０になる人だ

とはとても思えない。
　厨房に一番近い席、最早自分の特等席と成ったいつもの椅子に腰を下ろし、張さんはぐるりと首を巡らせた。
　どのテーブルも満席で椅子を確保できなかった男たちがでかい尻をどかりと床に落とすまでして、居場所の確保に走っている。酒を飲むわけでもなく、つまみを注文するわけでもない。かといって眠るわけでもなく、数十人もの大男たちが数少ない救命ボートを争って乗り込むように店内に所狭しと犇めき合っているのだ。中には殺気立つ者も見受けられ、店は異様な雰囲気に包まれていた。
　そんな様子に慣れているおれたちはカウンター越しに向かい合う形で、いつもの様に他愛もない会話を始める。
「腰痛めたって聞いたけど、大丈夫なのかい？」
「なぁに、これくらい大したことないわい。それに今日は大事な日だからのぅ」
　そう、
　今日はこの村に住む大勢の男たちにとって聖典とも言える、月に一度の重要な日だ。
　村の男たちに加えて、遠方で生活している羌族までその聖典のために、わざわざここまでやって来ている。村人たちと、乱暴者が多い遊牧民羌族の間では何かと諍いが耐えず、店で暴れる連中を仲介、または成敗するのは兄妹の中で年長者かつ店主であるおれの役目。両者がこうも接近していながらひとつの喧嘩も起こらないというのは非常に珍しいことだった。
「じいさんは今日も参加するのかい？」
「ああ、勿論さね」
「その割には何か買うところを見たことがないんだけど」
「ひっひっひ、格下に用はないさね。わしが狙ってるのはただ一つじゃ」
　にぃっとニヒルな笑みを浮かべる張さんの目は獲物が網に掛かるのを待つ肉食獣のような目をしていた。普段から掴みどころがないじいさんだが、その時ばかりは怪しさが倍増した気がする。
「おっ、来たみたいじゃな」
　入り口から差し込む太陽の光が何かに遮られ、屈強な男たちの視線が集中する。現れたのは怪しげなバンダナを頭に巻いて、それでも脳天からはみ出した無毛の頭を隠して切れていない中年の男性、商人だ。だが、そんなことはどうでもいい。男たちの目当ては頭ではなく、商人の背中でぱんぱんに膨らんだ風呂敷の中身だ。
「いやぁ、待たせたね。ほれほれ、道を開けてね」
　嘘くさい中華風の口調で商人が店内に入っていくと、むさ苦しい男たちが素直に道を開けていった。隙間など無かった店内に、赤絨毯で敷かれそうな一本の道が作り出され、崇拝している神様でも通行中のように男たちはその姿を片時も離すことなく見据えている。
　店の一角で止まり、振り返る商人。そしてそれに詰め寄る男たち。はち切れそうなまでに店内の緊張感が膨れ上がり、思わず冷や汗をかいてしまう。やはり何度経験しても、この瞬間だけは慣れることができない。一方、血走った視線を一身に受けても、商人は少しも臆する気配を見せなかった。
　むさ苦しい男たちの視線が自分に集中するのをしばらく楽しんで、遂に商人が風呂敷の中身を公開した。
「それではお待ちかね、今日の商品を紹介するね！　今回はとっておき、都から取り寄せた最新グッズばかり、目玉商品は二千枚限定の申公豹ちゃんポスター、それに人気急上昇中の新アイドルの鄧繟玉ちゃんのブロマイドまであるよぉ〜。さぁ、早い者勝ちね！！」
　ポスター、下敷き、ブロマイド、筆箱、下敷き、アイドルの全体像が描かれたＴ－シャツなど、ありとあらゆる仙女の描かれたグッズを見た男たちが一瞬にして獣に変貌する。

『うおおおおおおおおおおおお！』

　という怒号が店のあちこちから沸き上がり、店は一転してグッズを求めて争う戦場と化した。
「た、太公望、太公望ちゃんのを～！」
「雷震子ちゃんのは俺のものだぁ！」
「申公豹ちゃんのポスターを寄越せ、金額は倍払う！」
「俺は三倍だぁ、三倍でどうだ！？」
「四倍払う、だからそれを俺に！！」
「どけこらぁ！　ぶっつぶすぞ！」
「あぁん、んだとぉ！？」
　比喩ではなくて店の壁があまりの声量に軋んでいく。食器や酒を保管しているガラス窓にヒビが入ったのはすっかり御馴染みなので特に動じることもない。それと同時に厨房に避難していた１０人もの弟妹たちが注文を取りにフロアへと飛び出していった。
「月に一回のイベントだからな。しっかり注文を取って来いよ」
「了解、兄ちゃん！」
「あたしに任せておきなさいって！」
　客たちの興奮に乗じ、弟妹たちに注文を取らせてばっちり稼ぐ。これがおれたち一家の生命線である月に一度の稼ぎ時だ。
　……にしても。
「相変わらず凄いなぁ、仙女ブームってのは」
「そりゃあそうさね。あの戦に参加したやつらなら、誰でも夢中になっても仕方ないじゃろう。わしみたいにな」
　椅子から動かないまま、戦場と化した一角を暢気に一望する張さん。
　今から数年前、殷という国がこの地方を治め、『紂王』と呼ばれる御人が王様として君臨していた。民からも慕われ、名君と讃えられていた人だったが、妲己という妃を得てからは残虐非道な行いを繰り返し、あちこちで反乱を引き起こしてしまった。そしてその中で頭角を現したのが『周』という西方から立ち上がった国で、その王様である『武王』は諸侯を率いて紂王を倒し、国を治めているに至った。
　そして、殷周大戦と呼ばれたその戦で大きな活躍をした女性たちがいた。殷の陰には妖怪という化物たちが暗躍し、人間では到底叶わないその力に周は苦戦していた。それを倒すべく、武王に協力してくれたのが仙女と呼ばれる女性たち。不老不死の肉体と仙術、宝具（パオペエ）と呼ばれる特殊な武器を使った彼女たちは妖怪たちを次々と滅ぼし、周の勝利に貢献した。
　本来仙女というのは仙界、この下界の遥か上空に浮かぶ島々で生活を送る存在で、下界に災悪が訪れたりすると時折助けに来てくれるという庶民の味方。下界とはほとんど交流もなかったのだが、殷周大戦の折に彼女たちの姿を見た男たちはその美しさに熱狂した。宝具を扱い、邪悪な魔物を蹴散らしていく様は通常の人間の女性には持ち得ない美を誇り、人間たちを守るために奮闘する御姿はこの国の男という男を魅了した。その結果、大戦が終わった今でもその『仙女ブーム』という波が引くことなく続いており、当時作成されたブロマイドやポスターなどが今もこんな風に国中で競うように売買されているというわけだ。人気アイドルともなればファンクラブまで作られているらしく、下界の男たちの要望に応えて年に数回、首都でライブが開かれているとも聞いたことがある。娯楽というか、ここまで来ると社会現象。国王様まであるアイドルの熱烈なファンらしいから、そう言っても間違い

じゃないと思う。ある専門家の話では後百年はこのブームが鎮火することはないだろうと言っていた。
「そうだ、旦那、良いものがあるんじゃがな。どうじゃ、買ってみないかのぅ？」
「いえ、おれはいいですよ」
　長年の付き合いから、また何かのアイドルグッズを売りつけようとしているのだと悟り、張さんが品物を差し出す前に断った。興味がないわけじゃない。何たっておれだって立派な男だもの。でも、幼い頃に両親を亡くして十人ものチビたちを養っていかなければならない現在の家計状態では娯楽に使えるお金はない。
　この張さんといえば、何処ぞの裏ルートで色んな代物を取り寄せる陰の商人だったりする。いつぞやも滅多に手に入らないレアものを見せてくれたことがあった（その時も勿論買えな、オホンッ、買わなかったが）。
「まぁ、そう堅いことは言わずに。これは長い付き合いの旦那にだけ見せるとっておきじゃから」
「だからいらな……っ」
　執拗な勧誘にちらりと視線をやって、おれは息を呑んだ。
「じいさん、これっ……！」
「しぃ～っ、静かに。他のやつらに気付かれるじゃろ」
　がっしりと肩を組んで他の男たちからの視線をガード、改めて物（ぶつ）に視線を走らせた。
「仙女軍指揮官『太公望』ちゃんの戦場での勇姿を隠し撮りした代物、非売品じゃ」
　隠し撮りって、何でこの時代にカメラなんてものが有るんだよ。
「男のロマンってのは時に時代を超えるもんさ！」
「いや、何気に人の心の中を読まないで下さい……じゃなくて、何でこんなモンが！」
「なぁに、わしも大戦には参加したって昔話したじゃろ。その時にちょいとな」
　写っていたのは紛れもない、あのトップアイドル『太公望』。打神鞭という宝具を操り、仙女と呼ばれる女性たちを率いて一番の活躍を見せた女性。誰よりも真面目で誠実、そして慈悲の心を持って人々に接したことから、聖女とも呼ばれている、男たちの中でもトップ３に入る超人気アイドルだ。彼女のグッズは高額で取引され、生写真ならば一生遊んで暮らせるほどの金額が懸けられている。そんなファンからすればこれは喉から手が出る程の代物だろう。写真とはいえ、その整然とした姿に見惚れてしまった。
　……だが、一番問題なのは誰が写っている云々ではなかった。正確にいえば、その角度と下半身。膝ほどまであるスカートが風と跳躍した勢いで捲れ上がり、中の下着がちらりっと見えている。要するにパンチラと言われる状態だったのだ。
「……どうじゃ、普通なら城まで買えちまいそうな代物だが、旦那には世話になってるからのぅ、超格安でいいぞ」
「だ、だから、いいっておれは」
「なぁに肩肘張っているんじゃ。こんな機会、もう二度とないぞ」
「いいですって」
「老い先短いと観念したじじぃが、長年世話になった旦那に特別に売ってやろうって思っとるのに」
「だからいいですって」
「……そうか、そりゃ残念じゃなぁ」
　テーブルの上に出してあった写真が、再び張さんの懐へと戻っていった。それを名残惜しく最後まで見送ってから、おれも仕事を再開する。
「……」
「……」
「……」

「……」
「……」
「……」
　二人の間に長い沈黙が流れる。
「……」
「……」
「……いくら？」
「そうでなくてはのぅ」
　悲しい男の性かな。理性と欲望の果てしない葛藤の果てに、軍配が上がったのは男としての欲望の方だった。
　それを予想していたと言わんばかりにじいさんが満面の笑みでカウンターから身を乗り出してくる。完全に掌で遊ばれていたようだ。
（すまん、弟妹たちよ。やっぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんである前に男の子です）
「で、肝心の金額の方じゃがな、これくらいでどうじゃ？」
「いや、その半分で」
「それはあんまりじゃろ、せめてこれくらいで」
「もうちょい低く」
「じゃあこれくらいでどうじゃ」
「も、もうちょい低く」
「わかったわかった、特別サービスじゃ。ほれ、これでどうじゃ」
　そんなこんな交渉は半刻に渡って続き、結局生活費の三分の一で決着が付いた。粘りに粘ったが、年上で経験豊富のこの人に叶うわけがない。
（……こりゃ、しばらくおれだけ一日一食だな）
　やっぱり後悔は拭えない。が、その反面で手に入ったものもある。けどやっぱり良心の癇癪というものはあるもので何だか遣る瀬無い気持ちもある……。けどやっぱり冬が到来した懐とは反対に心の中には消えない灯火が確かに残っていた。
「でも本当によかったんですか？　こんな国宝級のもの売っちゃって？」
「物というのはな、その価値を見出してくれる者が持っていなくては意味がない。太公望ちゃんのファンであるお主が持っていた方が、その写真も嬉しかろう」
「な、何でそれを知って……」
　その指摘に心底に狼狽していると、じいさんが呆れ声で返した。
「前にわしのコレクションを紹介した時があったじゃろう。あの時、お前さんが太公望ちゃんの写真を見てぼそっと『可愛いな～♪』と呟いたのを聞いておったからのぅ。心に思っていることを口にしてしまう癖はいい加減直した方が良いぞ」
「あ、あははっ、弟妹にも散々言われてますよ」
　幼い頃からある癖だ。そのせいで色々と痛い目に会って来たので直そうとは心がけているが、身体に染み付いた癖ということもあって、おいそれと直せるものではない。もう諦めているのが正直な気持ちだ。
「話は戻すけど……本当にこれもらっていいの？」
「前にも言ったじゃろ。格下に用はない」
「格下って、これトップクラスの仙女じゃなかった？」
「わしは興味がないと言っておるんじゃ。興味がないものを持っていても、何も楽しくないじゃろう？」

「……あのさ、じいさんの目当ての仙女って一体誰なの……？」
「ふふ……聞きたいか」
　再び張さんの目が細められる。皺だらけの顔の中で鋭利に研ぎ澄まされたそれは皺の中に隠れて消えてしまう。再び表に出た捕食者としての顔に、思わず肝が震えてしまった。
「わしの目当てはな……」
　その表情に凄みを感じながらも、おれがぐっと頷き、じいさんが再び口を開けようとした瞬間だった。
　『ズガァァァン』と凄まじい震動が店全体を揺るがした。爆発して弾け跳んだ入り口から、粉々に砕けた木片の粉末やらと石礫やらが濃い土煙と一緒に入り込んでくる。
「ぬぁぁぁぁ！？　俺の太公望ちゃんがぁ！！」
「だ、大丈夫か、大丈夫かマイハニー！？」
「せ、せんぎょくちゃん～～～～！！？？」
　なけなしの小遣いを貯金し、ある者は女房から誤魔化してコツコツと溜めた漸く買った新品の品物が、土塗れ、木片塗れと化していく。中には修復不能までに陥ったものもあった。愛しの恋人を汚されて怒らないものがいようか。いや、いない。直接的に被害は受けていないものの、悲しみから涙にくれてうつ伏せる後姿に同情した男たちも次々と戦闘態勢に突入。ここに民族を超えた、男のロマンという強い絆で結ばれた強固な同盟軍が結成された。
「誰だぁ、こんな真似するのは！？」
「出て来い、くらぁ！？」
「男のロマンを踏み潰すやろうは万死に値する！」
「さっさと出て来いやぁ！！」
　屈強な男たちが一致団結して土煙に刃を突きつける。
　店内に広がっていくにつれて、土煙が大気の中に溶けて薄まっていった。

「侶遊ってのは、どいつだ？」

　ぼんやりと浮かび上がる影。鼓膜を打つ甲高い声色はこの惨劇を引き起こした人物にしては随分と愛らしいものだ。
　がたんっと張さんが椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がった。ぱくぱくと魚のように口を動かしながら、ただ目を見張っている。
「……まさか、あの姿は」
「じいさん？」
　立ち尽くすじいさんを尻目に、フロアへと躍り出る。
　張さんと同じようにざわめき始める店内。
　視界を確保するように腕をかざして様子を見る。
　すると、突然小さな人影が土煙を切り裂いて現れた。
「崑崙一にして仙界最強のスーパーアイドル、ヒーロー 哪吒様とは俺様のことよ！　殷王『紂王』、悪逆非道の数々、天が許してもこの俺が許さねぇ。さぁ、観念しやがれ！！」

＊　　＊

以上、回想終了。
こうして現在に帰って来たわけだが、やはり何度読み返してもおれが狙われる経緯がさっぱり分からない。しかも相手はグッズ売り上げベスト２のあの仙女『 哪吒』。あまりの興味のない俺でも知っているくらい人物だ。そんな彼女が俺を狙うって……。
一体どういう状況だこれは？
改めて状況を整理してみるが、やはり理解不可能。いつものように酒場を開いていたら、この少女が勢い良く
飛び込んできて「崑崙一にして仙界最強のスーパーアイドル、ヒーロー哪吒様とは（以下割愛）」と叫ぶや否や、おれの眉間に真っ赤な槍を突き出している。炎でも浴びているかのように矛先は熱く、灼熱の気候と一緒に嫌な汗を噴出させ、皮肉にもその熱気が、この状況が現実であることを証明していた。
「すみません、これ夢とかじゃないですよね？」
「はぁ？　お前、頭寝てんのか？　現実に決まってんだろ」
わおっ。
外見からはとても想像出来ないヤンキ―ちっくな口調が返ってきました皆さん。お兄さん驚きですよ。
っていうか夢かと思いたくなる原因に言われても説得力がない。
いやいや、そうじゃなくて。
「これって現実じゃないよね？」
混乱もここに極まり。自分の胸元に話しかけるおれだったが、とりあえず白い目で見られていないことにほっと胸を撫で下ろす。
「なぁじいさん、これって夢……」
「哪吒ちゃ～ん！　なたちゅわ～～～ん、こっち向いて～～～～！」
気付けば、張さんは人だかりの最前列に飛び込み、この世の終わりみたいに誰よりも大絶叫していた。おれのことなんて全く眼中になしで先ほどのハードボイルド的な雰囲気など欠片もない。
（……じいさん、年の割に盛り上がりすぎだよ）
念のために言っておくが、おれは断じて紂王なんて大それた人物じゃない。神様に誓って もいい。絶対に違う。大体庶民のお助けマン、正義の味方である仙女様が善良な一般市民を攻撃するはずが……。
「L・O・V・E、なたちゃ～～ん！」
「こっち向いて～、カワイイ～！」
「なたちゃ～ん、わしじゃよ。朝歌で一緒に戦ったちょ……」
「うるせえー！！」
少女の手首に嵌っていた輪が光ったかと思うと、巨大な光の閃光が張さん諸共観客の一部を呑みこみ、吹き飛ばした。すぐ隣を突き抜けて行った閃光がテーブルやカウンターをも粉砕して店に大きな穴を開けている。
「じ、じいさん！　おい、大丈夫か！　しっかりしろ！」
死屍累々の跡に転がる張さんに慌てて駆け寄り、その身体を抱え上げる。
どんな顔をしているかと思って覗き込んでみると、その顔には老人とは思えないほど幸せそうな笑

みが浮かんでいた。
「な、なたちゃ〜ん、も、もう一回……」
　バカだ。前から思ってたが、あんた正真正銘のバカだよ。いや漢（おとこ）だけどね。バカでもあるけど。
　突然飛来してきた槍の尖端を、おれは運よく屈むことで回避した。耳を削った部分がちりちりと熱で焦げている。一瞬でも遅ければ、串刺しになっていたところだ。
「この哪吒様の攻撃を避けるとは、やるじゃねぇか」
「哪吒？　哪吒って、やっぱりあの？」
　空中に浮かんだまま、残骸を跳び越えて接近してくる少女『哪吒』。その姿はブロマイドや写真で見た姿と全く同じだった。桃色の髪に、男勝りな口調からは想像もつかない可愛らしい風貌。そして右の掌と両手首、足裏の三つに装着された宝具。
　先ほど耳を削った長槍が火尖槍。空のように蒼い柄とは反対に、尖端から吹き出す炎は岩すらも溶かす。
　足裏の真下で回っている円形の歯車が風火輪。持ち主の命令に従って円形の筒の中で歯車が回転することで空中を自由自在に移動することができる。最高速度はフェラーリくらいだとの噂。
　そして最も気を付けるべきものが手首に嵌められた腕輪状の宝具、乾坤圏。通常は飾り気のない鉛っぽい腕輪に過ぎないが、持ち主の意思を吹き込むことで半径５メートルほどの大きな光輪が連なった筒状に変形、ロケットのように空中を突撃して衝突と同時に爆発を引き起こす。
　以上がブロマイドの裏欄『哪吒ちゃんの宝具大紹介コーナー』に書かれてあった記述内容。更にその欄の下には彼女の大戦における活躍記も載ってあり、戦いでは常に最前線に出向き、数百もの妖怪を蹴散らしたことから、英雄哪吒とも呼ばれるようになった、と記されてあった。
　だがそれも納得できる。生糸のように木目細かい髪が湖上の花弁のように散らばって、柔らかな質感と共に常人離れした雰囲気を創り出している。身体をびりびりと震わす存在感は気を抜けば、このまま気絶してしまいそうに強烈なもの。簡潔にいうなら、おれたちと違って大物的なオーラが全身から漂っている。だが、だからこそ現状に納得がいかなかった。
「どうして、おれを襲うんだ！？　庶民の味方の仙人様が、何でこんなことを」
「あぁ、元始のばばぁから予言があってな」
「予言……？」
「下界の侶遊というやつが、派閥争いでもめまくってる仙界に必要な男なんだと。それでそいつを仙界に連れて来いって命令を受けて、俺様が遥々ここまで来たってわけだ」
「……それで？」
　どこからどう聞いてもおれを襲う理由には聞こえない。何か話したいことがあるから連れて来いくらいにしか、判断出来ないんだが。
「てめぇ、あったま悪いなぁ。つまりだ、

『侶遊を連れて来い
　　↓
　侶遊は敵
　　↓
　敵といえば紂王
　　↓
倒したはずの紂王が蘇った
　　↓

しばく』

という俺様の名推理で……」
「馬鹿かお前はぁ！！　何で死んだはずの人間が蘇るんだよ！　しかも連れて来いって 言っただけじゃん！　誰も殺せって言ってないじゃん！　名推理じゃねぇよ、『迷』推理だよ。論理の飛躍がありすぎなんだよ、跳び箱三段くらい飛ばしてるんだよ！」
ぺったんこの胸を自信満々で叩く少女に、おれが全身全霊で突っ込みを入れた。
何なんだその小学生みたいな推理は。小学生みたいな身体だから、やっぱり脳みそまで小学生なのか。これが本当にあの英雄と呼ばれた仙女哪吒なのか！？
少女が面倒臭そうに鼻を鳴らす。
「はっ、悪の親玉を倒すのはヒーローである俺様の役目。てめぇは大人しく俺に殺されればいいんだよ」
「だから違うって言ってんだろ。お前は身長だけじゃなくて脳みそまでチビのか！？」
「あぁ！？　だれがチビだこらぁ！！！」
右腕の主砲（乾坤圏）が火を噴き、たちまち凄まじい爆裂音と土煙が辺りの地面を覆っていった。
危機一髪で回避したおれは一転二転しながら野次馬の前に飛び出し、咄嗟に掴み取っていた歴戦の相棒（喧嘩仲介の際に使用）自慢の武具『中華鍋』を少女の方に構える。しかし敵は思わぬところからやってきた。
「哪吒ちゃんのどこが馬鹿だ、こらぁ！」
「言い直せボケ～！！」
「ぶっ殺すぞこらぁ！」
「のわぁ～ちょっ、やめっ、すいませんすいませんすいません！」
客によって構成された男のロマン同盟軍が酒瓶や容器を次々に投げ付けて来た。平謝りするものの、崇拝する対象を貶された男たちの怒りは止まることを知らなかった。
やがて一部の者たちが声を大にして叫び出す。
「いいか、哪吒ちゃんはな、バカなところが良いおバカキャラなんだよ。それを否定するやつは俺らがゆるさねぇ！」
「そうだごらぁ！」
「もっと勉強してこい若造がぁ！」
「海に沈めるぞ、あぁ！？」
「あれ、そこは否定しないのか！？」
「だ……」
噴火直前にプルプルと震える火山のように、身を震わせる少女。最初は満足そうに聞いていたようだったが、バカ呼ばわりされて黙っていられるほど気は長くない。寧ろこの少女は短気な方である。
「誰がバカだこらぁ――――――！！」

＊　　＊

以下、エッチシーンの冒頭を掲載

　月の振る薄暗い小部屋にぴちゃぴちゃと卑猥な唾液音が響いていく。
　ベッドに腰掛ける形で息も絶え絶えに情けない喘ぎ声を出すおれの足元には、太腿を割って入った蘇安が赤い舌を伸ばし、表面に広がるオスの味を余すことなく楽しんでいた。
　手馴れた手つきでズボンを下ろされ、初めての経験に震えるおれが最初に受けたのは、ペニスへの洗礼だった。
　とっくにぱんぱんに膨れ上がっていたペニスの根元を冷たい掌が添えられる。久しぶりのオスの匂いに舌なめずりした蘇安は見せびらかすように赤い舌を唇の外に出してから、ゆっくりと亀頭へと伸ばしてくる。初めての感触と快感へと期待と不安、どきどきと早鐘を打ちながら凝視するおれの表情をじっくりと楽しんでから、漸く赤い舌が亀頭の先へと触れると、ぬちゃっと生温かい唾液の感触と舌の熱さに、がちがちのペニスがいきなりびくんっと飛び跳ねた。その初々しさに更に満足した彼女は亀頭に舌先を付着させてそのまま根元まで一直線に舌を下ろしていき、根元に到着すると、次は舌の腹でペニスを味わうようにじっくりと舐め上げながら、再び亀頭に到着する。その動きを何度も何度も繰り返して唾液の幅を塗り拡げていった。
　おれはというと、ただ舌の温かさと唾液のぬるぬるとした感触に耐えるだけ。敏感な亀頭に到着する度にペニスが飛び跳ね、蘇安が楽しそうにそれを眺めているが、おれに抗う術があろうはずがない。快感を与えるというより、初心なペニスに快感を馴染ませるようなゆっくりとした動き。平行して久しぶりの男性器の味を楽しもうとしているようにも思えた。
（……すごっ、……これ、気持ちいい）
　余裕たっぷりの表情で時折見上げてくる蘇安とは違い、おれには返事をする暇さえなかった。ペニス全体を味わうようにゆっくりと這って行く舌の感触。秀麗な唇から飛び出した赤い舌の生暖かさが生き物のように表面でぬるぬると蠢き、腰の浮くような甘美な刺激を与えてくる。グロテスクなペニスを、あの絶世の美女が、先ほどまで普通に話していた女性が舌を這わしている。愛しいを愛でるように、じっくりと味を確かめるように上へ下へと上下する唇。魅惑的な雰囲気を 孕んだ舌の動きに、脈打ち始めていたおれの欲望はもう完全に目を覚ましている。
　一通り舐め終わった後は、舐めやすいよう左手でペニスを仰け反らせてから、細かい皺の溝を含めた根元全体を丁寧に舐め尽し、ようやく洗礼が終了。唾液でてかてかと反射する様は、ペニスが蘇安のものになった証のようだった。
「ふふっ、だいぶ慣れてきたかしら♪」
　おれ自身肩で息をしながらも、ようやっと舌からの刺激に耐性ができたと思っていたのだが、それが大きな間違いだったと思い知らされる。見せ付けるように根元から裏筋を、舌の腹で絵でも描くようにねっとりと這わされると強烈な快感に身体が飛び上がった。
　それを予想していた蘇安は悦にまみれた淫靡な表情のまま、亀頭の下で長い三本の指を蠢かす。猫の顎を擽るような動きに息が切れ、亀頭の鈴口からぷっくりと先走りの汁が漏れ出してくると、尖った赤い舌先がそれを掬い上げる。両手を離して鈴口から一層漏れ出してくる汁を、蘇安はその度に舐めて舌に擦り付ける。舐め上げられる度にペニスが跳ねて、擡げてくる先端をまた赤い舌が襲う。快楽を求めるというよりも、遊ばれている感じだ。
「……あっ！　……う、あっ！　……ひっ！」
　彼女にとっては前座に過ぎない遊びでも、おれにとっては途方もない刺激。止まらない喘ぎ声と一緒に、身体中からは汗が噴き出し来る。

「逃げちゃダ〜メ♪」
　飛び上がらないよう両手で包むように押さえつけると、蘇安の唇が初めておれの亀頭に触れてキスを降らせて行った。わざと聴覚で興奮するように、はしたない音を立ててキスが為され、その意図通りに勢いを増していく鈴口の汁を味わうように何回も舐め上げる。
　肉付きのよいぷりぷりの唇が亀頭に吸い付くようにキスをしてはまた離れていく。その動きは段々と頭を痺れさせていくが、同時に物寂しさも感じてしまう。
　ずっと吸い付いて欲しい。痕が残るくらいに鈴口を吸われ、あの赤い舌の根元にペニスを突っ込んで思う存分舌を絡ませ、唇といっしょに竿を舐めしゃぶられたら、どれくらい気持ちいいのか。口内への未知の快感に対する期待が膨らみ、咥えて欲しいという願望が頭の中で膨れ上がっていた。
「気持ちよくなってきた？　それともっと気持ちよくなりたくて、もう我慢できない？」
　はっきりいって、もうやばかった。受け入れれば、死ぬということが分かっているのに、男の本能は目の前の甘美な快楽を求めて反応し続けている。身体中からは大量の汗が流れ出て白いシーツに水模様を作り出していた。月明かりで照らされる部屋とは反対に、頭の中は快感と欲望でもうぐちゃぐちゃだった。
「ちっ、違うっ。これは、……うっ、そ、蘇安、もう止め……てっ」
「ん〜、気持ちよくないの？」
「ひぁ！　ちょっ……まっ……」
「ちゅっ……むっ……ほら、こんなに出てるのに。これでも気持ちよくないっていえるの？」
　熱を帯びた息を亀頭に吹きかけられて益々敏感になっていたペニスがびくりっと震える。
「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ、」
「んふふっ♪　美味しいわ、侶遊ちゃんのおチ〇チン。ねぇ、本当に気持ちよくなぁい？」
「……そ、ん……なわけ……なっ」
　亀頭にぷりぷりの唇が押し付けられると、鈴口から漏れた先走り汁が裏筋に沿って垂れていく。
「これでも違うって言うのかしら？」
　今度はそれに、蘇安は口を付けようとはしなかった。ただ息が掛かるくらいの距離でじっと垂れ流れる様を眺めている。それに羞恥心を刺激されたおれは首を捩ろうとするが、見えない何かに体を操られているようで全く自由が利かない。
　ただの快感じゃないことは何となく感じていた。魅了と呼ばれる特殊な術でも受けたように、どんなに振り払おうとしても欲望の波が後から後から胸の中に湧き上がってくる。このまま流されてはいけないという理性に反して、身体の方は蘇安が与えてくる絶大な快楽に呑まれてすでに操り人形と化していた。
「ちがっ、う……蘇、おれ……に何か術、かけ……あぁ！？」
　おれの言葉を一切無視して蘇安が小さく口を開いた。ペニスの先端に近づいて亀頭を口内に咥えようとしていることが分かって、おれの胸が大きく脈を打ち始める。理性とは反対に、待ち望んでいた瞬間の到来に、無意識に息が荒くなっていく。
　だが、まさに口に含まれようとした瞬間、蘇安の動きがぴたりっと止まった。期待していただけに、心の中でそれ急かす衝動となぜ止まったのかと戸惑う感情が入り乱れ、自然と顔の表情が険しくなってしまう。
「ん、なぁに？」
　わざとらしく小悪魔的な笑みを浮かべる蘇安。
　口では否定していながらも、実際は待ち望んでいた心を見透かされていたこと、そして蘇安を求めている自分をはっきりと自覚して頭が熱くなった。
「……まさか、お前、もしかして……おれの心、読んで……」

「さぁ、どうかしら♪」
　弄ばれている。
　気に入った玩具でも扱うように、蘇安は完全におれで遊んでいた。
　唐突に左手の指で根元を挟まれて、鈴口を右手の人差し指でほじくられる。暫く刺激が止んでいたこともあって、突然の痛みにも似た刺激に先走りの流出する量が一気に加速した。
「これはなぁに？」
　親指と人差し指の間で精子を含んだ液が糸を引いた。目の前でそれを見せ付けられ、魅了の力に何とか抗い顔を捩ると、お仕置きと言わんばかりに右頬の肌を先走りの付いた指先が走った。
　自分の排出した体液におれが嫌悪感を滲ませると、表情の消えた蘇安が竿に右手を添えたまま、おれの隣に腰を下ろした。悩ましげな身体が潤んだ瞳と共におれに身体に密着する。
　白磁のような細い指が竿を扱いてくれるが、微弱な刺激はこれまでの快感に比べてあまりにもどかしい。物足りない刺激におれの理性が益々切れていく様を、蘇安は肩に頭を預けまま楽しげに眺めている。
「……正直になって」
　耳元で今まで違う優しげな声が響いた。脳に直接響く一言だけで身体が震えた。
「もっと気持ちよくなりたくない？」
　膝を立てて耳元に濡れた吐息を吹き込んでくる。艶かしい唇が頭のすぐ隣で誘惑する。
「……はなれ、ろ……たのむから……もう、やめっ……」
「……うそばっかり♪」
　ペニスの半ばを強く握られ、無理やり先走りが鈴口から押し出される。
「死なんて恐くなくなるくらいの快楽があることを、あたしが貴方に教えてあげる」
　本能的に『喰われる』と予感する。狼を前に、逃げ道を奪われてただ震えるだけしかできない野兎の気分。
　にゅるりっと未知の感覚に背筋が震えると、耳の中に赤い舌が入り込んできた。くすぐったさと身体の芯を溶かす柔らかい刺激が断続的に身体の神経を逆なでする。雷でも落ちたように背中が鳥肌で震え、反射的に身体を逸らそうとするが、右手はペニスに添えたまま、恐れを抱くおれの側頭部に左手の五指の指先が当てられてろくに力も込められていないはずなのに、逃げられない。生き物のように蠢き、奥へ奥へと侵入してくる赤い舌の感触に、身体全体が感電したみたいに何度も脈動して震え続け、密着したことにより強まった女の香りと蘇安の体温があらゆる五感を震わせて、抵抗力を奪い取っていく。臓腑を内側から舐められるような、頭の奥に直接異物が入り込んでくる異様な感覚。
　身体が喰われている。もう理性など欠片も無かった。
　ちゅぽんっと音を立てて耳から外れた舌はそのまま肌から離れることなく、うなじへ降り、輪郭にそって顎下まで到達する。ひかれた生温い唾液が冷たい空気に触れて心地がよい。
　唇に触れそうになってから、その寸前で赤い舌は首筋へ。軽く甘噛みされたまま、噴き出していた汗を汚れた染みでも拭うみたいに何度も舐め取られる。同時に竿を扱く手も動きを早め、表面に浮き出た血管は出したくても出させてもらえないことに対する苛立ちと焦燥感の表れだ。
　もう、限界だった。
「……そ、あ……もう……もう、げんか、い……」
「……なにが限界なの？」
「きっ、気持ちよく、……っし、て……頭が……きれ、そ、うあ！」
　頬を舌で撫でられて脳が焼き切れそうになる。
「どうして欲しいか、言ってみて」
「もう……おねがっ……かんべん、して……」

　最後に残った理性の糸が羞恥心と重なって口を閉じさせる。だが、蘇安はどうしても頑なに拒み続けたおれに言葉に出させたいらしい。
「ここには二人しかいないわ。誰も言わない、誰も聞いてない、あたしと侶遊の二人だけ」
　声が更に少しだけ優しくなっていて、心の鎧が簡単に剥がされて行く。
「二人だけの秘密。侶遊が言ってくれたら、何でもしてあげる。お口で侶遊のを咥えてたり、扱いてあげたり、さきっぽを吸ってあげたり、おっぱいだって好きなだけ吸わせてあげる。あたしの身体を好きにしていいのよ。それに、ここも……」
　蘇安が股間にやっていた手をおれの目の前に差し出した。びっしょりと濡れた指先は雫が滴るほどの愛液で溢れ、甘美な匂いが放たれている。それが先走りの残る反対の頬に容赦なく塗り拡げられた。まるでその匂いを染み込ませるみたいに。
　全力疾走した後のように、呼吸が乱れまくる。最後に残っていた理性の砦も潰され、遂に糸がぷっつりと切れたことで、喉から欲望の声が漏れ出した。
「舌で、舐めて」
「……それから？」
「す、吸って……」
「吸うだけでいいの？」
　どこまで言わせるつもりなのか。
理性が完全に切れたことで、普段なら口が裂けてもいえないようなことを、おれは悲鳴を上げるみたいに口走っていた。
「全部、全部出させて！　舌とか唇とか、もう全部で、溜まってるもの全部！」
「んっ、よく言えました。それじゃぁ、良い子にはご褒美を上げないとね」
　おれが言い終わると、子供を褒めるみたいに片頬についた先走りを舐め取られて思わずほっとする。同時に先走りを塗り潰してくれた唾液に対する嫌悪感が吹き飛び、すぐにそれが快楽の促進物に変換された。
　上半身の前をはだけさせた蘇安が再び足間に割ってはいる。衣服の中から開放された乳房が、余計に興奮を煽り、我慢ができなくなったおれは思わず急かしてしまう。今にもその果実にしゃぶりつきそうな程に目を血走らせるおれに対して『順番に、ね』と目で呟かれ、油汗に似たものを額に滲ませてしまう。
「はや……くっ！」
「あはん♪　それじゃあ、いただきま～っす♪」
　ご馳走を前にした彼女は礼儀正しく胸の前で小さく手を合わせてから、食らい付くようにペニスを一気に根元まで頬張った。
「ぁう！　うぁ……っ」

　続きは本編でお楽しみ下さい。